

不登校傾向を示す児童に対する学校を中心とした援助のあり方  
～ 小学校におけるメンタルフレンド活動を通して～

立命館大学応用人間科学研究科  
臨床心理学領域

本研究では、小学校における不登校状態から「別室登校」の時期を経て、少人数の育成指導学級(いわゆる特殊学級)へと編入したA君の事例について、メンタルフレンドの視点から検討する。この事例において筆者は、当初はA君の「別室登校」を1対1で支援するメンタルフレンドとして関わり、A君が育成指導学級に入級してからは、しだいに担任の補佐のような形で学級の活動に入り込んでA君への支援を続けた。

A君は不登校から一応は「教室復帰」したものの、最終的に教室を自分の「居場所」と感じることができてそこに「定着」するまでに、長い時間がかかった。その間、指導(援助)者たちは、A君をめぐるさまざまな出来事を通して彼の心の「揺らぎ」と「迷い」を共有した。

指導(援助)者たちは、その過程で、しばしばA君の「荒れ」や「問題行動」に遭遇し指導上の困難を抱えた。暴力や暴言といった形となって突然表出するそれらのものは、一時的に教室内で「居場所」を失ったA君の<心の叫び>であり、「自分の存在を受け止めてほしい」というメッセージでもあった。そうしたときに、A君のメッセージをしっかりと受け止め、その心に向き合い、彼に再度自分の「居場所」を見出してもらう場所として「別室」が重要な役割を果たした。「教室復帰」後も、筆者はしばしば「別室」での時間をA君と共有することで、彼の「揺らぎ」や「迷い」に寄り添った。

学校内で「居場所」を見失った(見失いやすい)子どもを、同じ学校の中で支援するメンタルフレンドは、子どもと一緒に学校の中の「居場所」を作る、見つける、という面で固有の役割を果たしているものと思われる。また、学校でのメンタルフレンド活動においては先生たちとの連携が不可欠であると同時に、その活動枠組みが流動的で周囲の影響を受けやすいため、MF自身が自らの活動枠組みに対してより自覚的である必要がある。